

# 研究大学コンソーシアム(RUC)の概要 及び 令和5年度の活動

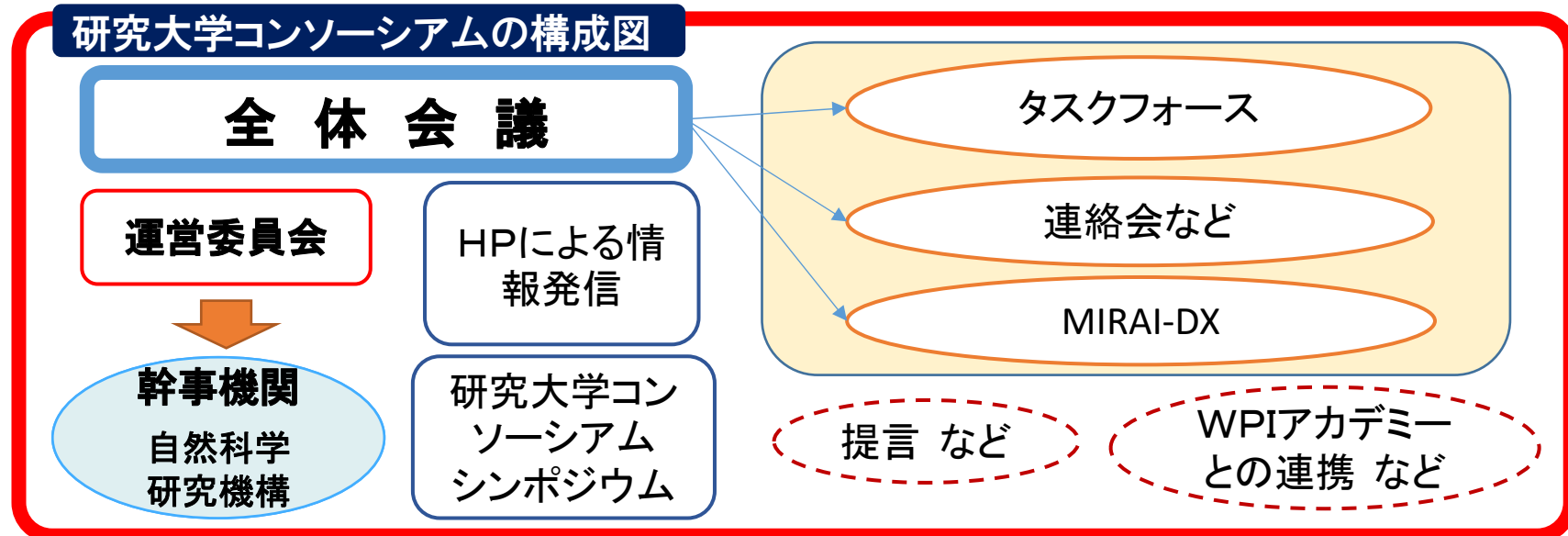
研究大学コンソーシアム(RUC)

# 研究大学コンソーシアム(RUC)の概要

## 研究大学コンソーシアム (RUC: Research University Consortium)

- 平成25年度: 文部科学省研究大学強化促進事業(平成25年度～令和4年度)に採択され、大学研究力強化ネットワークとして発足(研究大学強化促進事業採択22機関を中心に構成)。
- 平成29年度: 研究力強化に積極的に取り組む大学の**研究担当理事または副学長**の集まりとして組織。現在41機関で構成。
- 令和4年度は、タスクフォース・連絡会にて国際情報発信及び研究力分析等について議論を行う(詳細次項)とともに、シンポジウムを開催(10月、66大学等・369名参加)した他、MIRAI-DXを本格稼働。全体会議議長を名古屋大学に依頼。令和4年度で補助期間が終了したが、NICA参画大学(富山大学、愛媛大学、鹿児島大学)及び一橋大学及び人間文化研究機構が参画することが全体会議で了承された。
- 令和5年度は、引き続きタスクフォース・連絡会で議論を行う他、11月にシンポジウムを開催予定。

### 研究大学コンソーシアムの構成図



# 研究大学コンソーシアム構成大学等

- 全体会議議長：名古屋大学 門松健治副総長
- 全体会議副議長：岡山大学 那須保友学長
- 幹事機関：自然科学研究機構
- 運営委員会構成機関(11機関)：筑波大学、東京大学、東京工業大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、岡山大学、九州大学、熊本大学、奈良先端科学技術大学院大学、自然科学研究機構

(ご参考)

研究大学コンソーシアム構成大学等のうち

科学技術・学術審議会大学研究力強化委員会委員所属機関(7機関)：  
 東北大学、東京大学、東京農工大学(主査)、豊橋技術科学大学、  
 岡山大学、広島大学、人間文化研究機構



北海道・東北地区(2大学)  
 北海道大学、東北大学

北陸地区(5大学)  
 新潟大学、富山大学、金沢大学、福井大学、  
 北陸先端科学技術大学院大学

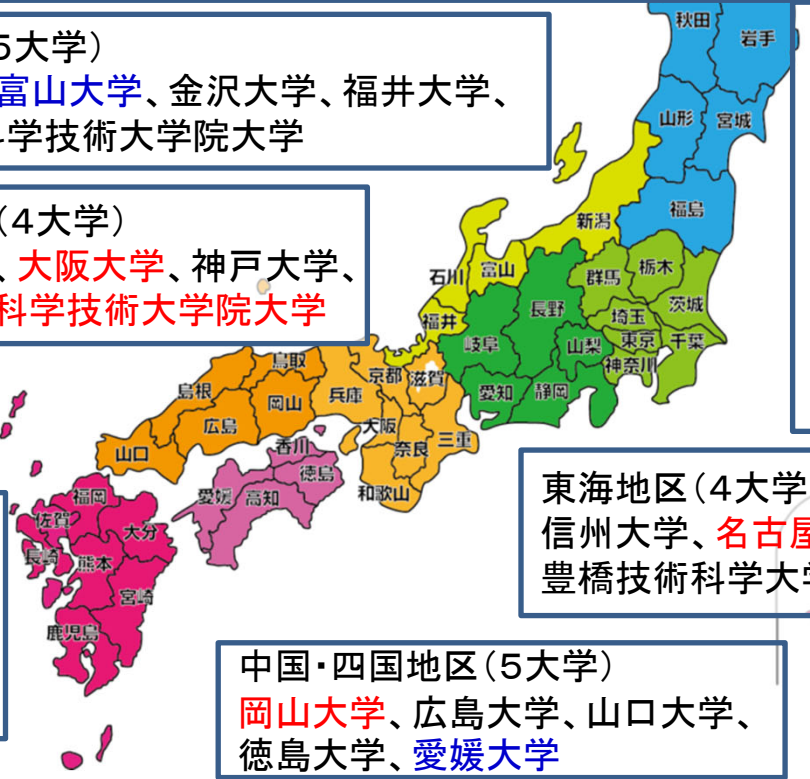
近畿地区(4大学)  
 京都大学、大阪大学、神戸大学、  
 奈良先端科学技術大学院大学

関東地区(12大学、4機関)  
 筑波大学、千葉大学、東京大学、  
 東京医科歯科大学、東京農工大学、  
 東京工業大学、電気通信大学、  
 一橋大学、横浜国立大学、東京都立大学、  
 早稲田大学、慶應義塾大学、  
 人間文化研究機構、自然科学研究機構、  
 高エネルギー加速器研究機構、  
 情報・システム研究機構

九州地区(5大学)  
 九州大学、  
 九州工業大学、  
 長崎大学、熊本大学、  
 鹿児島大学

東海地区(4大学)  
 信州大学、名古屋大学、名古屋工業大学、  
 豊橋技術科学大学

中国・四国地区(5大学)  
 岡山大学、広島大学、山口大学、  
 徳島大学、愛媛大学



・赤字は運営委員会構成機関  
 ・青字は令和5年度から参画した大学等

## 研究大学コンソーシアムを取り巻く状況

- 令和5年度は、研究大学強化促進事業終了後最初の年となるが、引き続き、日本の大学の研究力強化・国際的な可視化が喫緊の課題となっている。
- 更に、国際卓越研究大学や地域中核・特色ある研究大学強化促進事業などの公募が行われるなど、研究大学コンソーシアムを巡る状況も大いに変化している。
- このため、研究大学コンソーシアムに求められる状況の変化、取り巻く課題の整理及びタスクフォースでの検討などが求められている。
- 想定される課題
  - 大学や分野の枠を超えた研究連携の推進（エビデンス及びURAのネットワークの活用）
  - 研究人材育成とネットワーキング（若手・博士、技術、URA）
  - 日本の研究の国際的な可視化

等

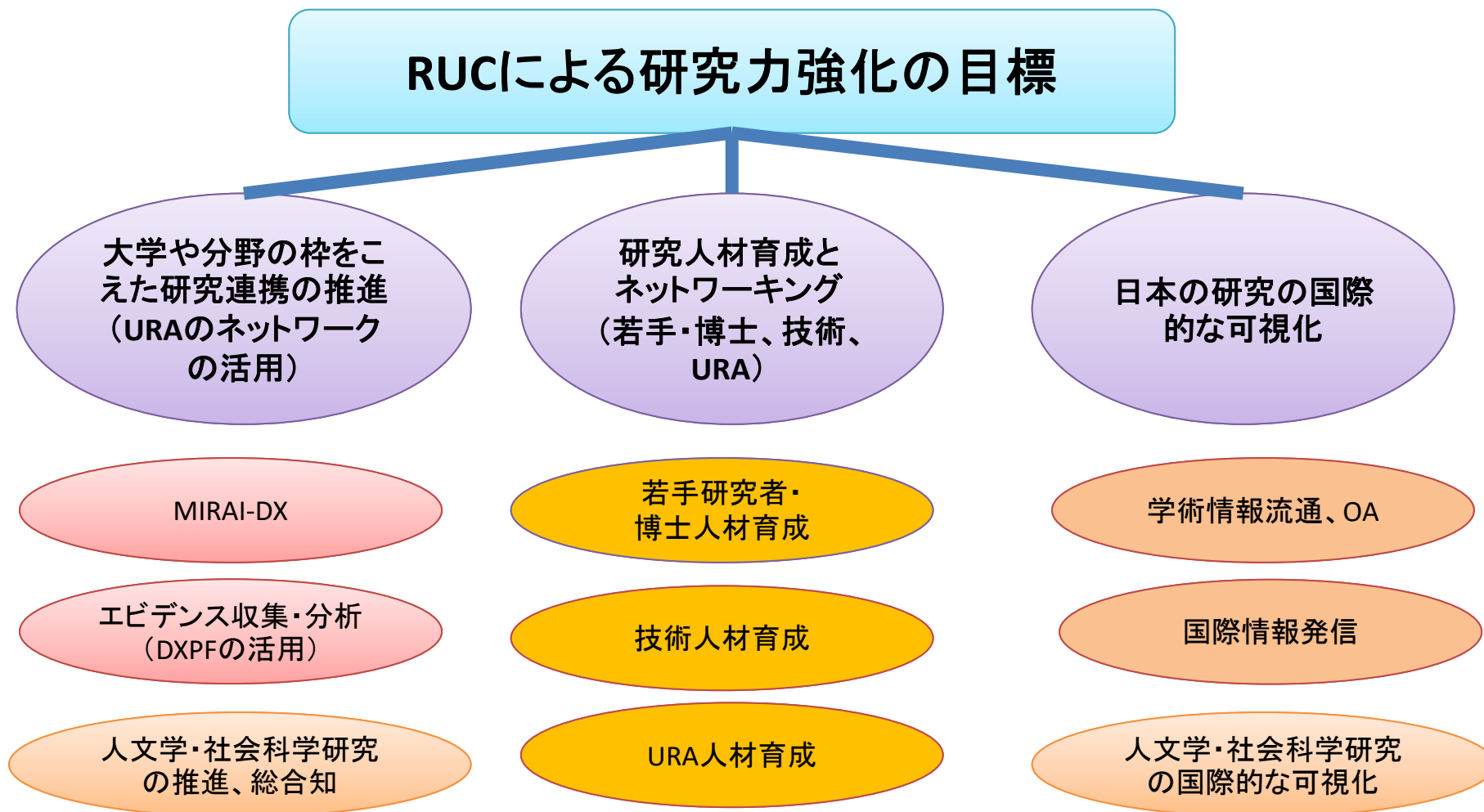
# 研究大学コンソーシアム 発展的展開（2023年度～）

日本全体の大学の研究力強化にむけて、分野間、機関の枠を超えた連携の促進が必要、そのために必要な3要素として、共有(SHARE)だけでなく、企画戦略(Strategy & Planning)、実践(Action)までを、協働して実施する。



新たな課題を解決するために、**新・RUC**へ発展的展開

# 研究大学コンソーシアムによる研究力強化の目標



# 研究大学コンソーシアムのこれまでの実績

- 国際情報発信TF（座長：京都大学）を中心とし、**米国AAASのEurekAlert!との連携を推進**。RUCの研究大学群からの国際情報発信・国際プレスリリース発信に大きく貢献（本取り組みは、2014年から実施）。
- 研究力分析TF（座長：大阪大学）を中心に、参画する各機関における研究力分析・IRに関する好事例の収集と公表を実施。令和4年度には「**研究力分析 好事例集**」を編集・公開。
- 新たな学際研究・共同研究のテーマ若しくは社会課題について、大学や機関の枠を超えて**URA**が議論を行い、新たな研究チームの提案等に繋げるため、**研究者情報などを一元的に集約するDXプラットフォームを立ち上げ、運用開始(MIRAI-DX)**。
- URA質保証制度の確立に向け、RA協議会など他の関連団体との連携により、**URAスキル認定機構の設立に貢献**。  
URAスキル認定機構機構長をRUC構成大学等のメンバーから任命（故 山本進一全体会議議長（元名古屋大・元岡山大・元豊橋技術科学大研究担当理事）が初代機構長 ⇒ 令和4年度途中より、自然科学研究機構・井本敬二理事に交代）。



**MIRAI-DX**



一般社団法人  
リサーチ・アドミニストレータースキル認定機構  
Japan Certification Board for Research Administration and Management Skills

# 「研究力分析に挑む」 研究力分析タスクフォース 事例集(2022)

## 第一部 研究力分析に向き合う

- 1 はじめに (矢吹 命大、平井 克之)
- 2 研究力分析の目的 (中島 聡、岡崎 麻紀子、菊田 隆、渡邊 優香)
- 3 EBPM・EBMgtと研究力分析・研究戦略立案 (押海 圭一、磯部 靖博、小泉 周)
- 4 研究力分析とデータベース (池田 虎三、上田 盟子、マーク・ハンゼン)

## 第二部 研究力分析に取り組む

- 東北大学における URA 研究力分析手法勉強会 (湯本 道明)
- 学術雑誌データを用いた「分野間親和性」の検討 (高橋亮、海邊健二、鈴木一行、高橋さやか、武田浩太郎、Hansen Marc、湯本道明)
- 高エネルギー加速器研究機構における若手教員数の推移と将来予測 (安部 保海)
- プレスリリースと論文被引用数の関係性の分析を行う方法論の検討 (高橋さやか、海邊 健二、Hansen Marc、高橋亮、鈴木一行、武田浩太郎、湯本道明)

- 被引用数世界大学ランキングデータ蓄積の試み (菊田 隆)
- IR 分析と URA 業務の DX による効率の連携について (中島 聡)
- サイエンスマップを活用した京都大学の研究活動モニタリング～研究の多様性の観点から～ (橋爪 寛、岡崎 麻紀子、渡邊 吉康)
- 「部局訪問」による研究力分析の情報共有の実施 (久間 木寧子、平井 克之)
- 多様な強みを把握し、URA による研究力強化につなげるための分析手法 (伊藤 広幸)
- URA による研究力分析の取り組み例 (渡邊優香)
- 岡山大学における研究 I R の活用事例及び体制整備 (松本 匡史)
- 横浜国立大学の研究者総覧における代表的な業績と SDGs の入力内容について (大野由美子、矢吹命大)

## 研究力分析 に挑む

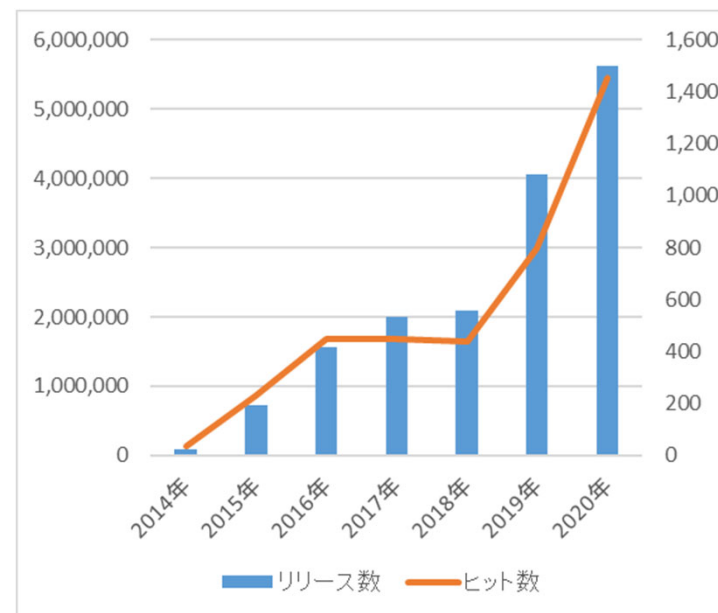
研究力分析タスクフォース  
事例集  
2022年4月  
東京大学コンソーシアム

<https://www.ruconsortium.jp/site/tf/682.html>

## 国際情報発信に関するタスクフォース

### ○EurekAlert!との連携による国際情報発信力の強化

大学等の国際情報発信力を強化・促進するため、引き続き、AAAS (米国科学振興協会) と連携し、EurekAlert!を国際情報発信プラットフォームとして活用するとともに、英文プレスリリース作成支援サービス (NRAP) の利用などの取組みを進めた。EurekAlert!におけるリリース数、ヒット数とも事業開始年 (2014年) に比し、飛躍的に増加した。





# THE世界大学ランキング 指標変更(2023年9月)

Times Higher Education  
世界大学ランキングに関する  
申し入れについてー  
研究力に関するランキン  
グ指標のより適切な運用  
を目指した要望ー  
(2019年)

自然科学研究機構・小  
泉周が、THE世界大学ラ  
ンキング・国際アドバイ  
ザリーボードに加わるこ  
とに(2022年2月～)

THE世界大学ランキング指標の変更(THE WUR 3.0, 2024)

1) Citation指標の半分15%分

FWCIのみ から、以下3指標の合算へ

- ・75パーセントイルFWCI
- ・上位10%引用論文数(補正)
- ・ネットワーク効果(googleのページランクのようなモノ)

2) 国別補正、キロオースーパー補正を中止

3) Reputationサーベイを、THEが独自に実施

**THE World University Rankings 2024**  
20<sup>th</sup> edition

**Top 10 universities in Japan**

Rank 2024	Rank 2023	Institution
29	39	The University of Tokyo
=55	68	Kyoto University
=130	201-250	Tohoku University
=175	251-300	Osaka University
=191	301-350	Tokyo Institute of Technology
201-250	301-350	Nagoya University
301-350	501-600	Kyushu University
351-400	501-600	Hokkaido University
351-400	501-600	University of Tsukuba
401-500	501-600	Tokyo Medical and Dental University (TMDU)

www.thewur.com  
#THEunirankings

**【令和5年度の活動】（全体会議・運営委員会）**

○全体会議

年2回程度開催予定（7、3月頃）

○運営委員会

活動に係る企画立案や全体会議からの付託事項の審議のため、必要に応じて開催

## 【令和5年度の活動計画（令和5年7月21日（金）全体会議で審議・了承）】

- 2つのタスクフォース（①エビデンスに基づく分野をこえた研究連携に関するTF、②大学間連携による研究基盤強化TF）において、各テーマに沿ったディスカッション、課題整理、情報共有、勉強会等を行うとともに、課題解決にむけた取り組みを実施する。
- 連絡会において、喫緊の課題などトピック（例. 研究力分析、国際情報発信、学術情報流通 等）に関する情報共有を進める。
- 人文社会系研究と他分野の研究連携を見据え、「人文社会系研究連携ワーキンググループ」において、人文社会系研究力の把握にむけた検討等を開始する。

※必要に応じ、文部科学省担当者及び内閣府（CSTI事務局）担当者にオブザーバとして参加頂くことも考えられる。

## <タスクフォースについて>

- 大学の研究力強化に関して共通する課題をテーマとし、各テーマに沿ったディスカッション、課題整理、情報共有、勉強会等を行うとともに、課題解決にむけた取り組みを実施する。

**●エビデンスに基づく分野をこえた研究連携に関するTF**  
(座長：岡山大学 副座長：東北大学)

分野融合・組織間連携の推進にむけて、各大学の研究力の特徴を多角的な視点で把握するため、必要となる関連情報・エビデンスの収集と共有、分析を目的とする。分野や機関の枠をこえた連携による研究力強化をすすめるため、課題を整理し、必要となる調査（エビデンス収集）や分析を行う。

さらに、それらエビデンスを基軸としながら、各大学のURAの協働を促し、MIRAI-DXプラットフォーム等を活用し、組織や分野をこえた研究連携を発展させることを想定する。

## ●大学間連携による研究基盤強化TF (座長：自然科学研究機構)

大学と大学共同利用機関が連携し、大学間連携による研究力強化推進をすすめるための研究基盤の強化に関する議論を行う。自然科学研究機構・大学間設備ネットワーク事業との連携も図る。

### ○想定する課題

文部科学省とも連携しつつ、大学研究力強化委員会での議論、統合イノベーション戦略2023を踏まえ、以下に関する課題に対応する。

特に、博士人材を確保・育成し、多様な研究人材(若手研究者、技術職員、URAなど)として、アカデミアのみならず社会で活躍する環境を整えることについては、優先度の高い課題である。

- ・研究者育成や次世代PIの育成についての課題
- ・研究設備の整備及び維持に関する課題
- ・技術職員に関する課題
- ・産学連携に関する課題
- ・その他、大学の枠を超えた取組を希望するまたは期待する事項

## ＜連絡会について＞

喫緊の課題などトピック（例. 研究力分析、国際情報発信、学術情報流通 等）に関する情報共有を進めるため、連絡会を実施する。

特に、学術情報流通に関しては、喫緊の課題として、連絡会を新たに設置する。

## ●学術情報流通の在り方に関する連絡会

- G7科学技術閣僚会合で宣言された「immediate open and public access by 2025」が国の方針として示された。
- 国内では、オープンアクセス（OA）推進に向けて、出版社交渉などの強化ならびに、即時オープンアクセスの「義務化」にむけた方策が議論されている。
- RUCの一部の大学においては、JUSTICE（大学図書館コンソーシアム連合）との協働のもと、すでに転換契約への転換が行われており、OA化が進みつつある。

上記を踏まえ、RUCにおいて、学術情報流通の在り方に関する連絡会を立ち上げ、その中で大学間で情報共有を進めることとなった。

連絡会は東北大学が取りまとめとなり、東北大学、東京大学、東京工業大学にて企画運営を行っている。

今後の企画として、報告会や定期的なセミナーを予定している。



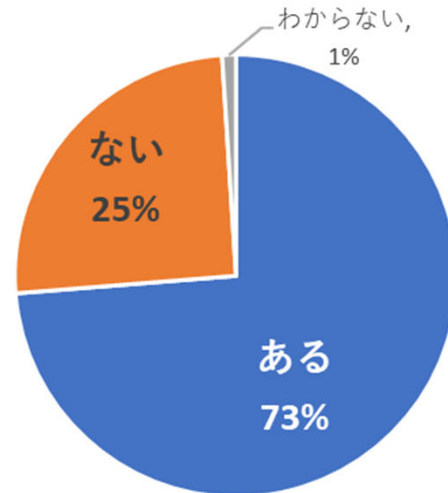
# オープンアクセスの推進

オープンアクセスにするための費用(APC)支払い経験の有無\*1

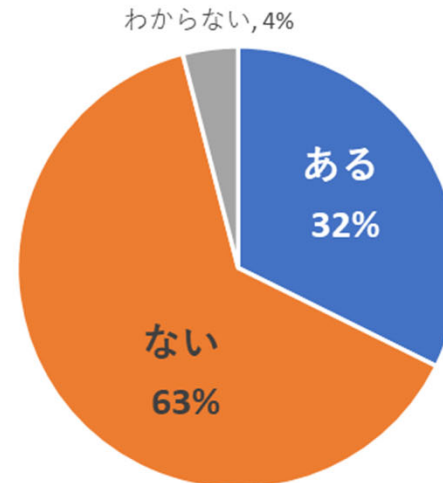
日本はAPCの  
支払いが個人  
単位(86%)



個人だけに依存  
するのではなく  
組織的な取り組  
みが必要



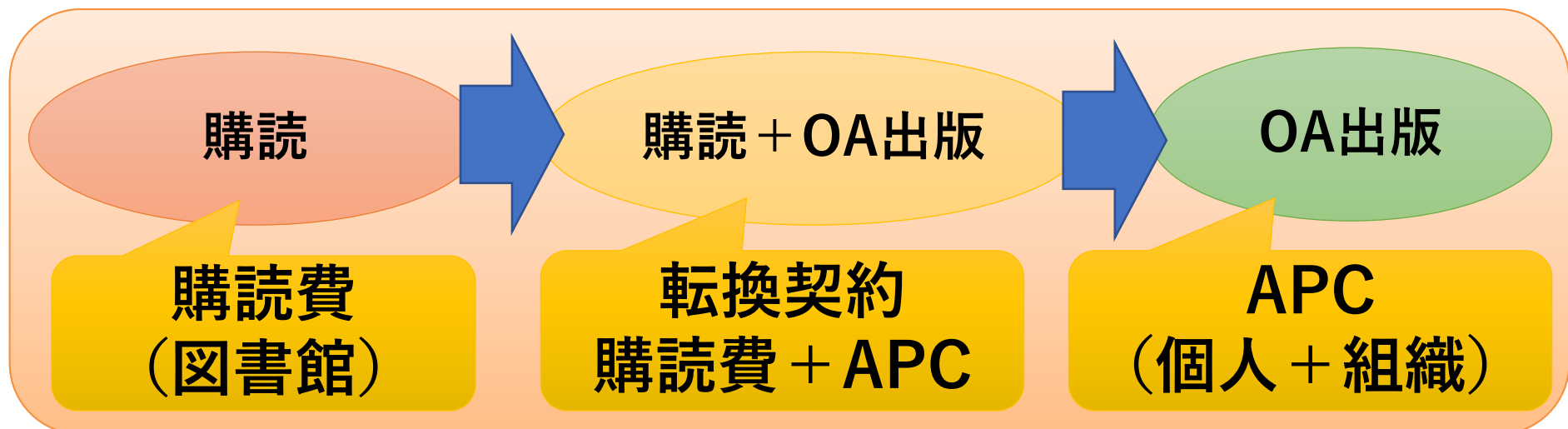
獲得研究費1,000万円以上



獲得研究費100万円未満



・ 科学技術・学術政策研究所 科学技術の状況に係る総合的意識調査(NISTEP定点調査2020)



## オープンアクセス(OA)の推進にあたって大学等で議論すべき課題の整理

研究大学コンソーシアム・シンポジウムにて(2023)

オープンアクセス(OA)の推進にあたって、大学等で議論していただく課題について、参考までに、以下、整理しました。

1. OAを推進することにより、大学等からの論文等成果発表の国際的な可視化をすすめ、大学の研究力強化に資する取り組みとすることが重要である。
2. OAは、個々の研究者が個別に取り組む課題ではなく、大学が組織として取り組む課題であることを認識することが重要である。
3. それぞれの大学においては、個々の研究者の研究費の多寡によらずOAを推進することができるよう取り組むことが重要である。例えば、次世代を担う若手研究者の研究成果の国際的な可視化を支援するなどの取り組みが必要となろう。
4. OAの取り組みは、大学等の規模や分野によっても大きく異なるため、一つの手段に依存せず、様々な手段を組み合わせた取り組みが重要である。
5. OAは、その体制構築、それにかかる費用の確保や新たな転換契約等、大学図書館だけで取り組む課題ではなく、大学マネジメントの課題として、執行部のリーダーシップのもと、全学的に取り組むべきものである。

## ●人文社会系研究連携ワーキンググループ (WG長：人間文化研究機構)

人文社会系研究と他分野の研究連携は重要な課題であり、「人文社会系研究連携ワーキンググループ」を立ち上げ、人文学・社会科学研究力の把握にむけた検討等を開始した。

座長は、人間文化研究機構(押海特任助教)であり、一橋大学と協働して実施する。

9月14日(木)人間文化研究機構 栗本理事と一橋大学 大月理事との間で今後の進め方などについて意見交換を行った。

今後は、人文社会系研究力の把握にむけたモニタリング指標の試行などの実施を検討。

### 1. 人文社会系研究評価に関する検討

#### 定量的評価

##### モニタリング指標の試行 (SciREX共進化)

国際ジャーナル論文数、プレプリントの数、CiNII掲載論文数

図書、報告書、展示、研究基盤(データ、資料)提供などの定量的把握と評価指標の検討

#### 定性的評価

##### 研究の質

人社系研究の質に関するインタビューなどの定性的調査

##### 社会的インパクト評価

人社系研究における社会的インパクトに関するインタビューなどの定性的調査

# 共進化プロジェクト「我が国の人文・社会科学の国際的な研究成果に関するモニタリング指標の調査分析」(2023年～)

## 我が国の人文・社会科学の国際的な研究成果に関するモニタリング指標の調査分析

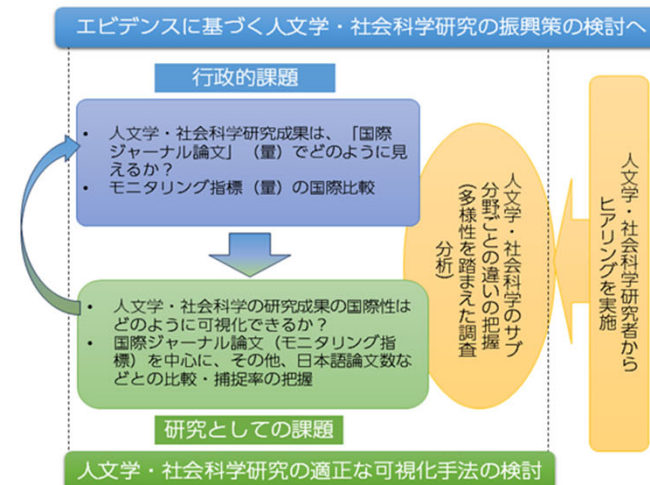
**実施体制**  
 国立大学法人一橋大学 軽部大 教授、大学共同利用機関法人人間文化研究機構 後藤真 准教授、大学共同利用機関法人自然科学研究機構 小泉周 特任教授ら  
 文部科学省研究振興局振興企画課学術企画室

**概要・目標**  
 「人文・社会科学研究の国際性の可視化が重要である」という大学等・研究現場現場とおよび行政の共通認識にもとづきのもと、特に国際ジャーナル論文に関する定量的指標構築の可能性についてについて、フィジビリティの検討・調査分析を行う。

**政策課題**  
 本プロジェクトの政策課題は、「人文・社会科学研究の国際性」について、いかに適切に可視化し状況を把握するかにある。特に、人社の国際的な研究成果として、モニタリング指標として掲げられている「国際ジャーナル論文数」を主たる対象とし、その指標の定量的把握・計量手法、分析手法等モニタリングの手法のフィジビリティについて検討を行う。

**具体的な研究計画**

- 数えるべき国際ジャーナルの範囲の限定（「人社学術ジャーナル・リスト」①選別）：人社研究成果として把握すべき、学術ジャーナル誌の全てをリストアップする。
- データ取得・統合（②データ取得、④統合）：国際的なジャーナル等の世界最大のデータベースであるScopus（Elsevier社）を中心とし論文数を把握する。また、補完的に、国内ジャーナル論文群についての把握も実施する。
- 研究者・研究機関の名寄せ（③名寄せ）：KAKENデータベース等を用いて研究者・研究機関の名寄せを行う。
- 定量的カウントの方法検討（⑤カウント）：国際ジャーナル論文発表の定量的な数を、人社全体、また、サブカテゴリごとに分類して実施する。
- 人社研究者ヒアリングの実施（⑥ヒアリング）：人社研究者に対し、プロジェクトの事前と事後でヒアリングを実施し、人社研究の詳細なカテゴリごとの違いを把握する。



# 研究大学コンソーシアム活動計画 MIRAI-DX事業

## MIRAI-DX

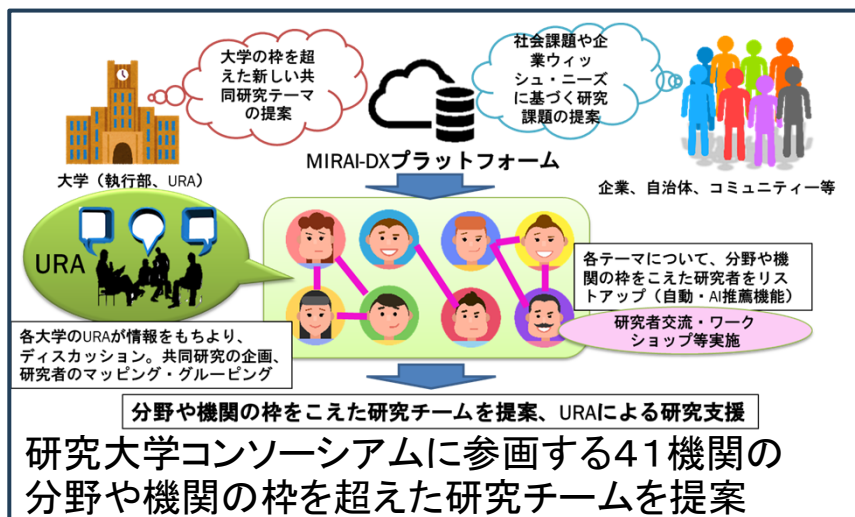
MIRAI-DXの推進(座長:東京工業大学)

Multi-disciplinary trans-Institutional Research Assistance Initiative

<https://www.ruconsortium.jp/site/mirai-project/>

新たな学際研究・共同研究のテーマ若しくは社会課題について、大学や機関の枠を超えてURAが協力、議論を行い、新たな研究チームの提案等に繋げるため、研究者情報などを一元的に集約するDXプラットフォーム

- ・令和2年度補正予算を活用し、令和3年度に構築・試行的取り組み、令和4年度から本格稼働。
- ・RUCに参画している大学等のURAが、学際研究・共同研究のテーマ及び研究者情報を研究者情報をもちより、MIRAI-DXに格納。
- ・格納された共同研究のテーマに基づき各大学のURAが議論を行い、分野や機関の枠をこえた研究チームを提案するとともに、URAによる研究支援に繋げている。



### 試行的取り組み(令和3年度)

「ポストコロナ」をテーマとした研究マッチングを実施。113名の研究者が参画し、URAがマッチングを実施

### 令和4年度～

企業からMIRAI-DXへの提案に基づく新たな産学共同研究の開始

○米国加州ベンチャーAlidaBioからの提案に基づき、URAがマッチングを実施。複数大学が産学共同研究に参画(千葉大学等)

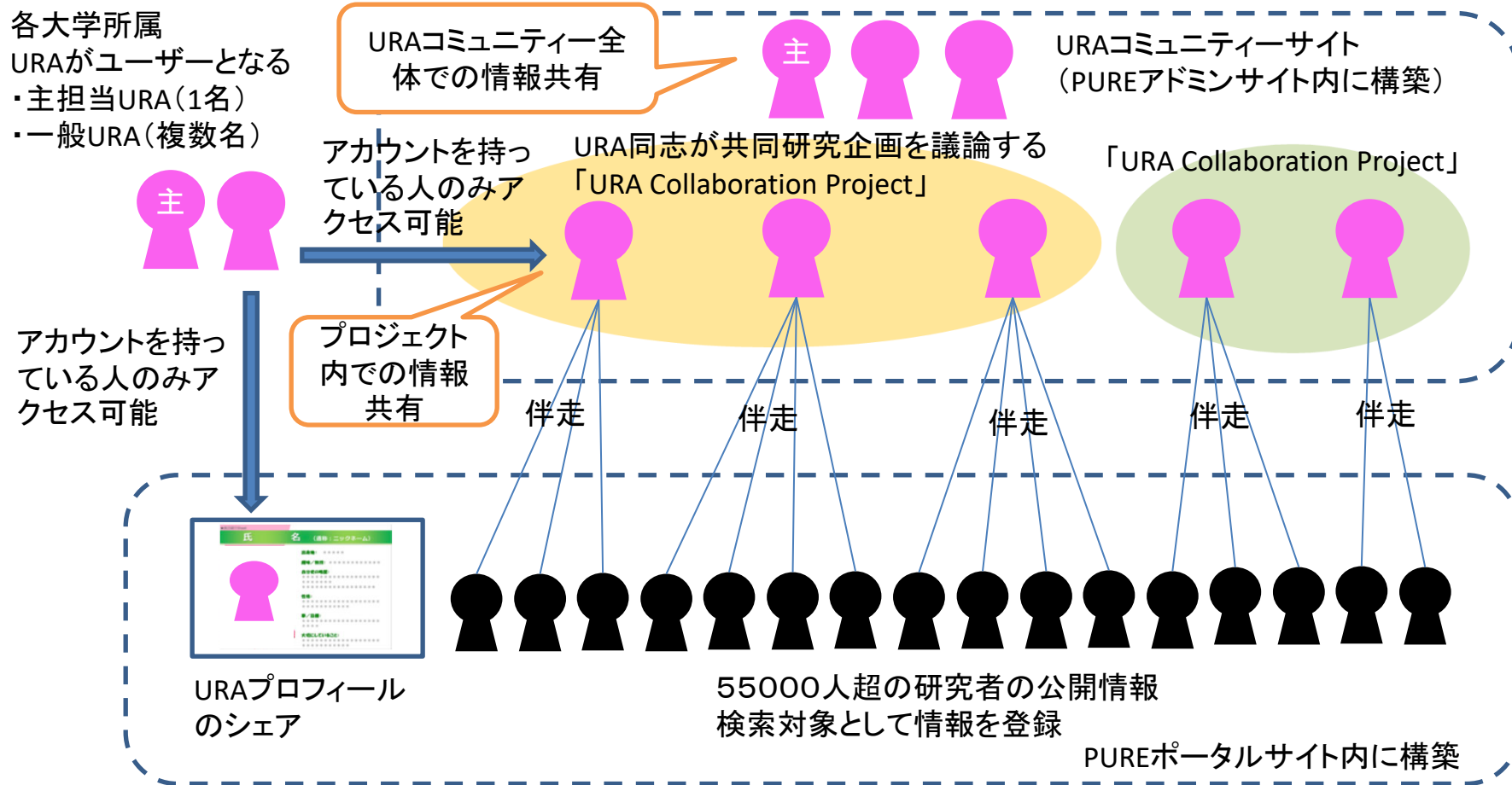


○東工大・東京医科歯科大学・金沢大学の研究者・URAによる「オルガノイドに関する階層を超えた研究連携の提案」  
○東京大学(資料編纂所)や京都大学の研究者・URAを中心とする古典籍に用いられる「和紙の分析」に関する共同研究連携

○基礎生物学研究所と東工大の研究者・URAの連携によるAI技術の応用によるイメージング技術の発展など

MIRAI-DXが起点となり分野や機関の枠をこえた共同研究スタートアップの提案

# MIRAI-DX 分野や機関の枠をこえたURAによる協働(研究連携)



# MIRAI-DXからの発展：オルガノイドに関する特別号およびワークショップ

## Provisional title (仮タイトル)

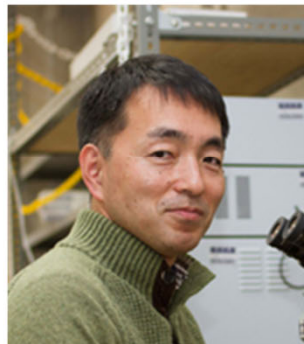
### New technological advancements and their researchers: from cell development engineering to tissue, organoid, organogenesis applications

新技術の進展と研究:細胞開発エンジニアリングから組織、オルガノイド、器官生成応用へ

- エルゼビアのジャーナルで、細胞工学からオルガノイドに関する特集号を制作
- ゲスト・エディターに第一線の日本人研究者を動員
- 伴走URAによる支援（ジャーナルとの交渉など）



条昭苑教授  
(東工大)



田川陽一准教授  
(東工大)



岡本隆一教授  
(医科歯科大)



河崎洋志教授  
(金沢大)



European Journal of Cell Biology

Open access

#### セミナー

### 研究者キャリア形成における学術雑誌 エディターの価値

～大型共同研究の提案・推進との連携～

本セミナーでは、欧米に比べ日本では関心が低い「学術雑誌の特集号等を編集するエディター」の活動が**研究者キャリア形成**に有益であり、さらには**大型共同研究の提案や推進**へのチームアップに役立つことなどを含め議論する。

#### 参加方法と申し込み手順



登録用QRコード

下記URL、または、左のQRコードよりご登録ください。  
参加登録URL: <https://forms.gle/6Tgr5uMb3o83QDNj8>

- お申込み後すぐに、セミナー参加のためのURLを表記したメールが送信されます。もしメールが届かない場合は、迷惑メールフォルダに入っていないかご確認ください。入っていない場合は、メールアドレスをご確認の上、再度、参加登録をしてください。
- セミナー実施日の1～2日前にリマインダーをお送りいたします。

#### 主催

2023年度自然科学研究機構OPEN MIX LAB (OML)公募研究プログラム

採択課題名「多分野研究者の参加するオルガノイド関連トピックに関するワークショップの開催」  
セミナー実行委員会

問合せ先: [editor-seminar@googlegroups.com](mailto:editor-seminar@googlegroups.com)

セミナーウェブサイト: <https://gamma.app/public/--03e6rir0kedq982>



ウェブサイト用  
QRコード

11月9日

# 研究大学コンソーシアム活動計画 シンポジウム・ホームページ

## シンポジウムの開催

### 【令和5年度活動計画】

「研究大学コンソーシアムシンポジウム(第7回)」を開催する。企画・運営は、運営委員会において行う。

※WPIアカデミーとの連携については、令和5年度も継続して実施。

#### <開催骨子>

- 目的: 研究大学コンソーシアム構成機関における好事例等を共有するとともに、それら取組の全国的な普及・定着を図る
- 日時: 令和5年11月8日(水) 10:00~16:50
- 会場: 日本橋ライフサイエンスビルディング (ハイブリッド開催)
- 対象: 研究大学コンソーシアム構成機関関係者及び参加を希望するその他の大学・研究機関・企業等関係者
- 内容: 講演、パネルディスカッション等

## ホームページの運用

### 【令和5年度活動計画】

引き続き、各大学等からの掲載希望情報や、各大学におけるURA等の取組、研究大学コンソーシアムの各取組実績、研究力強化に資する好事例等を、随時、ホームページに掲載・発信していくが、掲載内容も含め、ホームページの見直しを行っている。



# ご静聴ありがとうございました。

文部科学省をはじめ、日頃ご支援頂いております皆様には感謝申し上げます。

研究大学コンソーシアムのHPでは、タスクフォース及び連絡会シンポジウム等の活動に関係した情報を随時掲載しています。そちらも是非ご覧ください。

<https://www.ruconsortium.jp/>